

Development and practice on first-year experience in Kobe Tokiwa University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 光成, 研一郎, 伴仲, 謙欣, 大城, 亜水, 京極, 重智, 佐野, 太亮, 近藤, みづき, 溝越, 祐志, 高松, 邦彦, 中田, 康夫, MITSUNARI, Kenichiro, BANNAKA, Kenya, OSHIRO, Tsugumi, KYOGOKU, Shigetomo, SANO, Daisuke, KONDO, Mizuki, MIZOKOSHI, Yuji, TAKAMATSU, Kunihiro, NAKATA, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20608/00001200

原著

神戸常盤大学における初年次教育の開発と実践

光成 研一郎¹⁾ 伴仲 謙欣²⁾ 大城 亜水¹⁾ 京極 重智¹⁾ 佐野 太亮³⁾
近藤 みづき¹⁾ 溝越 祐志³⁾ 高松 邦彦⁴⁾ 中田 康夫⁵⁾

Development and practice on first-year experience in Kobe Tokiwa University

Kenichiro MITSUNARI¹⁾, Kenya BANNAKA²⁾, Tsugumi OSHIRO¹⁾,
Shigetomo KYOGOKU¹⁾, Daisuke SANO³⁾, Mizuki KONDO¹⁾,
Yuji MIZOKOSHI³⁾, Kunihiro TAKAMATSU⁴⁾, and Yasuo NAKATA⁵⁾

要旨

神戸常盤大学は、建学の精神のもと、知性と感性を備えた専門職業人の育成を目的としている。現代社会は、国際化、情報化、科学技術の高度化が加速し、変化の激しい社会である。このような社会で専門職業人として必要とされるためには、大学で学んだ知識・技術を基礎として時代や社会の変化に対応できるよう自律・協働でき、生涯学び続け、主体的に考える力を有しておかなければならない。そこで本学では、専門職業人の育成のための第一歩として、2017年に受動的な教育から能動的な学びへの転換を図ること、そして「学ぶ喜び、知る愉しさ」を実感できる初年次教育科目として、「まなぶる➤ときわびとI」と「まなぶる➤ときわびとII」を開講するに至った。本稿では、初年次教育学会教育実践優秀賞の受賞を契機として、本科目のさらなる充実に向けて課題や展望を明らかにするとともに、ウィズコロナ・ポストコロナ時代の初年次教育についても論考する。

キーワード：初年次教育、チームベースドラーニング、ふり返り、デジタル・トランスフォーメーション、入学前教育

Abstract

Based on its mission statement, Kobe Tokiwa University aims to cultivate students to become professionals with both intelligence and sensitivity. In recent times, rapid changes in

1) 教育学部こども教育学科 2) 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科 3) 保健科学部医療検査学科 4) 前保健科学部診療放射線学科
5) 保健科学部看護学科

internationalization, computerization, and technology are resulting in swift societal changes. Therefore, it is necessary for professionals to be able to think and judge by themselves, continue lifelong learning, and present their thinking based on the acquired knowledge and technology. Presently, Kobe Tokiwa University has been undergoing university reform since 2017. As part of the reform, we started a new first-year experience (FYE) course called “Academic Skills and Deep Learning I and II,” which exemplifies the paradigm shift in education from teaching to learning. In this article, by receiving an award as a chance, we will clarify the challenges and views of the course to enhance it further and will also reflect the first-year experience (FYE) with the corona and post-corona.

Key words: first-year experience (FYE), team based learning (TBL), reflection, digital transformation (DX), pre-enrollment experience

神戸常盤大学初年次教育改革の背景

初年次教育の重要性が指摘されて久しい。大学教育の大衆化、ユニバーサル化の影響などから、高大接続への対応、教育の質保証などが叫ばれ、初年次教育やリメディアル教育の整備が大学には求められるようになった。杉谷は『進化する初年次教育』のなかで、「初年次教育は、専門教育以前に、大学教育、大学生活へのスムーズな移行を目的とし、学習技能、学習意欲、さらには大学生としての自覚の涵養までを含む、正課、正課外にわたる総合的教育プログラムを意味する」¹⁾と述べている。

神戸常盤大学（以下、本学）において、初年次教育を意識した教学マネジメント改革を推進していくなかで、正課・準正課・正課外活動と総合的教育プログラムを整備し、全学共通基盤教育分野の運営を始めたのは、2017年のことである²⁾。2015年に上田國寛学長直下、カリキュラム等検証委員会を設置し、各学科に科目数の削減、すなわちカリキュラムのスリム化を図ることを厳命し、全学共通基盤教育分野の新設に至った。本学は、このスリム化に実に2年も要した。

基盤教育分野の新設と大学共通の3つのポリシー

の策定期間が同じであったことは偶然ではない。2017年度より大学の3つのポリシー、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）を一貫性のあるものとして策定、公表することが大学に求められるようになった³⁾。それまで本学には、全学共通ポリシーは存在せず、学科ごとに3つのポリシーは策定されていたが、独立独歩の4つの専門職養成の学科が同じキャンパス内に存在するだけでしかなかった（現在は5学科。2017年当時、診療放射線学科は開設されていなかった）。大学・教学マネジメント改革の波に乗り遅れず、これを契機とし、全学共通ポリシーの確立を図るべく、学科の枠を超えた基盤教育分野が誕生したのである。

2017年3月に改訂された学習指導要領において、教育者側から学習者側への重心の移動といえる「教育のコペルニクスの転回」が強調されることとなる。「教育から学習へのパラダイム転換」⁴⁾である。そのパラダイム転換が求められる背景には、社会の変化が挙げられる。21世紀の社会は、国際化、情報化、科学技術の高度化が加速し、社会状況が目まぐるしく変化する知識基盤社会であり、日々

刻々と変化していく社会状況に対応すべく生涯をととして、主体的に学び、その成果を適切に評価される生涯学習社会でもある。

大学教育で育成すべき力については、『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』⁵⁾のなかで、「知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力、人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担い、倫理的、社会的能力、総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力。想定外の困難に際して的確な判断をするための基盤となる教養、知識、経験」と述べられている。また『学士課程教育の構築に向けて（答申）』⁶⁾のなかでは、①知識・理解、②汎用的技能、③態度・志向性、④総合的な学習経験と創造的思考力の4つが知識基盤社会、生涯学習社会で求められる学士力として、記述されている。

これらの社会的背景およびニーズから、自律・協

働でき、生涯学び続け、主体的に考える力を有した学生（対人援助専門職）の育成を企図して、本学において基盤教育の核となる必修科目として「まなぶる➤ときわびとⅠ」（以下、「Ⅰ」）および「まなぶる➤ときわびとⅡ」（以下、「Ⅱ」）を新規に開設することになった⁷⁾。

全学必修科目「まなぶる➤ときわびと」の設計

保健医療と教育を担う対人援助職を育成する本学は、保健科学部と教育学部で構成されている。対人援助職として、自律的に思考し、判断し、表現できることはもちろん、多職種（他職種）と連携して「チーム」として協調的に実践していくことが求められる。医療検査学科、診療放射線学科、口腔保健学科、看護学科においては「チーム医療」、こども教育学科においては「チーム学校」という概念がその重要性を示唆している。

このことも踏まえ、本学では対人援助専門職を育成する大学の初年次教育全学必修科目としての「Ⅰ」「Ⅱ」は、①チームとして協働できる、②「学

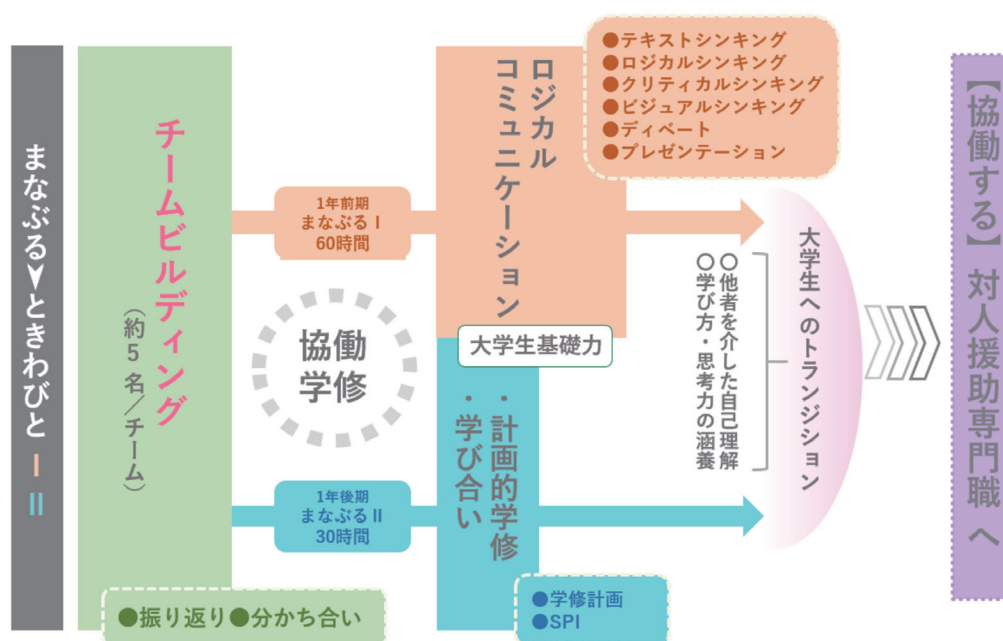


図1 「まなぶる➤ときわびとⅠ・Ⅱ」の概要

ぶ悦び、知る愉しさ」を実感できる、③学びの型を修得できる、ことを目指した科目としてその設計を行った(図1)。

チームとして協働できる学びを実践するには、学生参加型・協働型学修スタイルでなければならない。「I」「II」ともにチームベースドラニング(Team Based Learning、以下 TBL)型学修を実践している。基本的に、5学科1名ずつの5人グループで学修を進める。TBLとは、学んだ知識を実際に活用する演習をとおして、グループで協働して考え、主体的に学ぶ学修形態のことである。自己の考えをエビデンス(根拠)に基づいて論理的に主張し、他者の考えを傾聴することなどが求められ、自己および他者、ひいてはグループ全体の考えをふり返り、問題を発見、解決していく学修形態といえる。「活動あって学びなし」⁸⁾にならないための工夫として、この学修においては、リフレクションをとりわけ重視している。個人で行う「ふり返り」とチームで行う「分かち合い」をもっとも重要な要素として位置づけていることは、この授業の大きな特徴といえる。また、TBLにおける活動を単なる体験として終わらせず経験へと深化させるためには、学びの可視化が有効であると考え、学生が学び、経験したことを書き記す、学びのポートフォリオを活用している。このポートフォリオは、学生が本科目においてどのような経験をし、どのような力を修得することができたかを確認し、自らの学びの軌跡を書き記すことができる。これを活用する効果として、学生が自らの学びのプロセスを一目で確認でき、ふり返りを実践することで、次の学習課題が明確になり、次の目標設定が容易になることなどが想定される。毎年最終授業においては、このポートフォリオを用いて、学びのプロセスを確認し、ふり返ることで、授業を完結させている。

「I」「II」を貫く学修目標は、「他者を介した自己理解」と「学び方・思考力の涵養」である。「I」においては、「情報を正しく受け入れ、自らの考え

を根拠に基づいて共有・発信する力」をロジカルコミュニケーションと定義し、その修得をテーマに、論理的思考力、協調性・協働力、表現力、省察力、自己管理能力などの汎用的能力の育成を目的としている。「II」においては、「計画的学修」と「学び合い・教え合い」をテーマに、論理的思考力、協調性・協働力、知欲、省察力、自己管理能力などの汎用的能力の育成を目的としており、「II」を「I」で学んだ実践場に位置づけている。

TBLの評価を行うには、学びのプロセスを評価するポートフォリオ評価や、学修(パフォーマンス)の到達度を評価するルーブリック評価など多面的、多角的評価が求められる。多人数の教員で評価を行うので、評価の方法や基準に揺らぎが生じないようにルーブリック表を作成し、評価を行っている。形成的評価を、ワークシートと本学が導入している学修管理システム(Learning Management System、以下 LMS)である「manaba[®]」で実施するeポートフォリオで行い、総括的評価を、レポート試験で実施し、それらを総合して科目の最終成績としている。

ワークシートには自己評価も取り入れており、プレゼンテーションの評価においては、教員評価に加えて、学生によるピア評価も実施している。上述のような多面的な評価を実施しているため、多人数の教職員で担当し、教員1人の学生担当を約15人と制限している。

質保証をめざした授業運営体制の工夫

「まなぶる➤ときわびと」においては「I」「II」ともに多人数で担当する科目であり、約450名の新入生を30名の教職員が担当している。教職員は2人ペアで約30名の学生を担当することになる。専門および所属学科の異なる教員同士、少人数ながら職員も担当する。これだけの人数が関わるとなると、各教職員の本科目へのコミットメントに差が生じる可能性がある。そこで本科目では、学

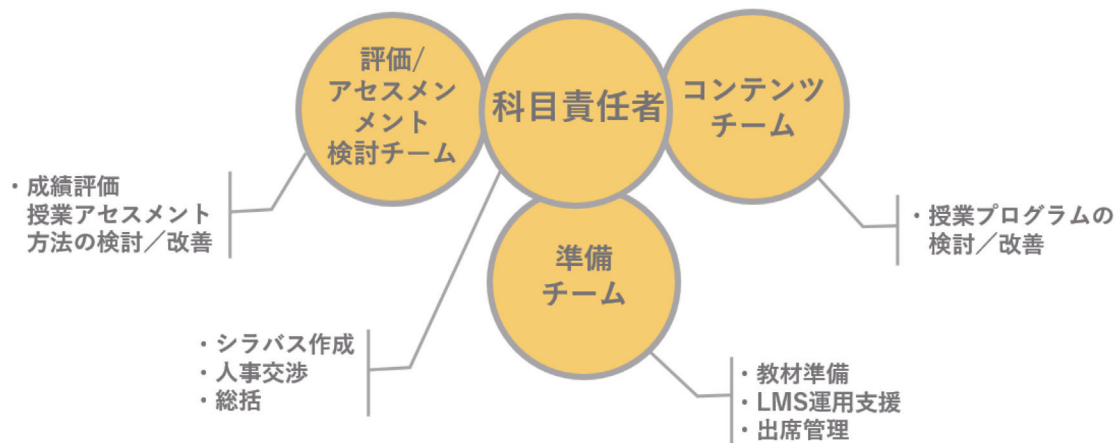


図2 授業運営体制

生に範を垂れる、教員の背中を見せるという点も意識し、本科目担当者全員が本科目に自律的・主体的に取り組んでもらうために、図2のような授業運営体制を構築した。また、図中の各チームのメンバーはルーティン化とマンネリ化を防ぎつつ、科目の質をさらに向上させるために適宜入れ替えを行っている。教員のペアリングは、新任教員や比較的教育歴の短い実務家教員と、教育経験実績がありファシリテーションに長けた教員を組み合わせている。この授業は専門を教授する授業ではない。それゆえ、学生の主体性や積極性を引き出し、モチベーションアップに繋がる授業運営をねらいとしている。教員の具体的な役割は、グループ間での話し合いやふり返りが活発になるようにファシリテーションを実施すること、学生が記述したワークシートやレポートに対して、一週間以内にコメントを返すことである。時宜を得たコメント返しが、学生の学修意欲の喚起や学修習慣の確立にも影響を与えているからである。担当を職員にも広げることによって、ボランティア活動や地域活動といった正課外の活動と正課の授業との結びつきを強める効果もあると考えている。

学期前には担当者が集まり、授業の打ち合わせを行う。また、毎回の授業の実施前・実施後にそれぞれ30分間、計1時間の打ち合わせを実施している。そこで実施後の授業のふり返りを行ったり、

次週の授業内容・方法の確認を行ったりしている。対面の情報共有できる時間には限りがあるため、LMS (manaba[®])、マイクロソフトのOneDrive[®]、メーリングリスト等の情報通信技術 (Information and Communication Technology、以下ICT) を活用し、出席状況、授業資料の準備、コメントの入力、ループリックを活用した成績をリアルタイムで編集可能とするなど、情報の共有・標準化を図っている⁹⁾。2020年度は、コロナ禍で一部授業をオンラインで実施せざるを得ない状況に直面したが、ICTの活用により、特段大きな問題は生じなかった。

この授業の副次的効果として、実務家教員や教育歴の短い教員のファカルティデベロップメント (Faculty Development : FD) として機能し、学科や専門にとらわれない教員間の繋がりを生んでいると考える。科目終了後に実施している担当教員に対する意識調査の結果からも「教員間の連携・協働」に関する項目において、肯定的な評価が得られている (図3)。全学共通授業の実施、初年次教育のデータを蓄積・管理することで、専門の異なる教員同士の共同研究の発展や、これまで教育研究に取り組んだことがなかった教員が教育研究に関する学会発表¹⁰⁾¹¹⁾ など、教育分野のみならず、研究分野にもプラスの効果が生まれている。

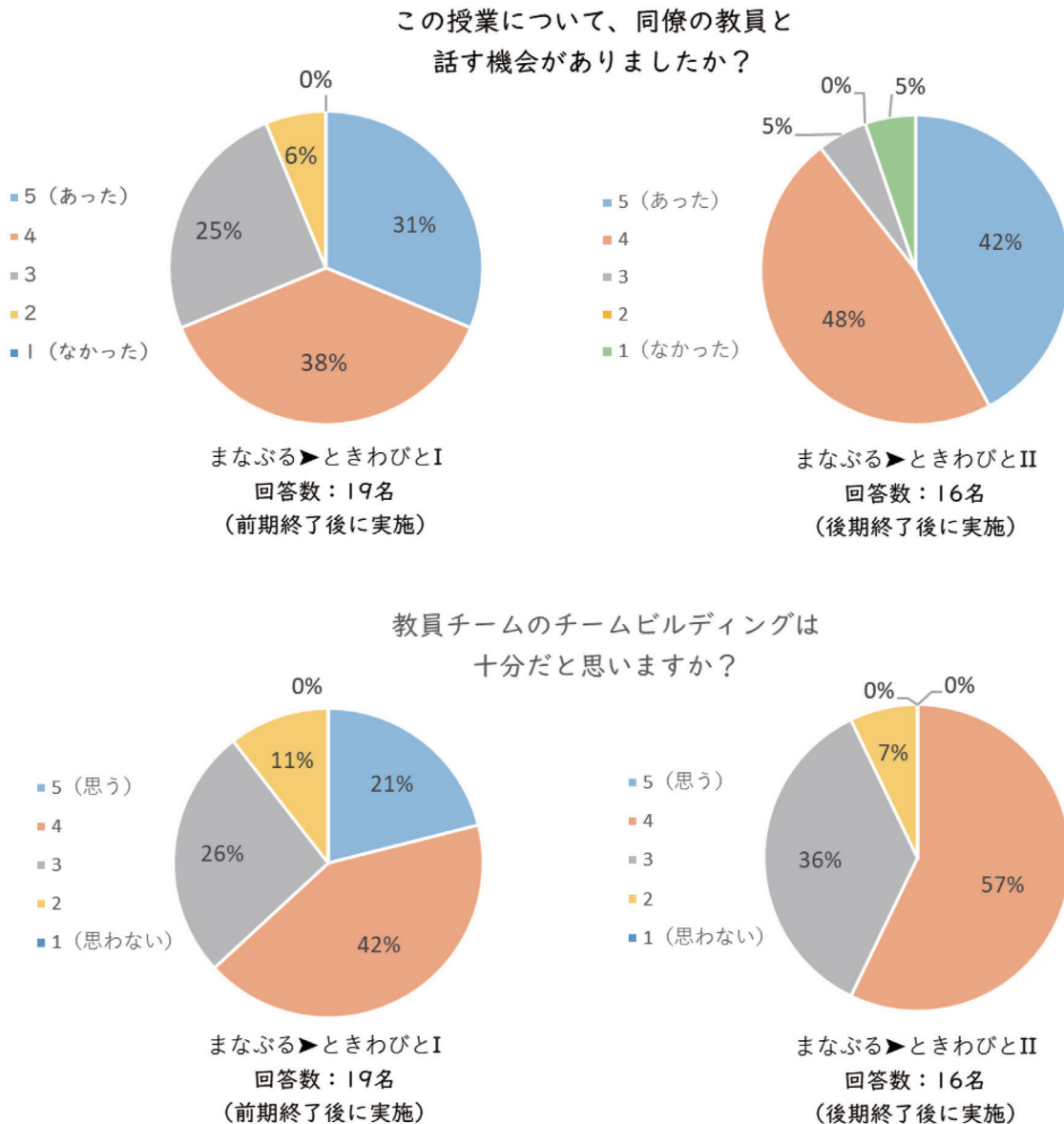


図3 担当教員に対する意識調査 (2020 年度実施)

初年次教育科目としての 目的達成にかかる検証

河合塾の初年次教育調査報告によると、初年次教育の目的を、①学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつくる、②高校までの不足分を補習する、③大学という場を理解する、④人としての守るべき規範を理解させる、⑤大学の中に人間関係を構築する、⑥レポートの書き方、文献検索方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミックスキルの獲得する、⑦クリティ

カルシンキング・コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法を身につける、⑧高校までの受動的な学習態度から能動的で自立的・自律的な学習態度への転換を図る、の8つに分類している¹²⁾。

本学の初年次教育全学共通科目「I」「II」は、この上記8種類の目的を考慮して設計している。そこで、8種類の目的達成について検証する。

対人援助専門職を育成する本学の初年次教育で特に力を入れているのは、①(「II」で重点的に実施)と、⑥⑦⑧(「I」で重点的に実施)になる。②

に関しては国家試験や教員採用試験などに対応するためそれぞれの学科で実施している。③に関しては、「I」の授業内容プレゼンテーションのテーマとして「大学と高校の学びの違い」を取り上げていたので目的は達成していると考ええる。⑤に関しては、授業評価の項目の高さの1つに毎年他学科の学生との交流が挙げられており、目的は達成できている。残る④に関しては「I」「II」にとどまらず4年間で育成していくべき課題と考える。以上のことから、本学の初年次教育、とりわけ「I」「II」において初年次教育の目的をほぼ達成できるカリキュラムになっていると考えることができる。

「I」「II」の実践をとおして、初年次教育の重要性について記述してきたが、初年次教育と入学前教育の連携、初年次教育と並行して学科主導で実施するリメディアル教育、キャリア教育との連携がこれまで以上に求められる。

ウィズコロナ・ポストコロナ時代の 初年次教育の展望

最後にここまでの6年間（2017～2022）の実践を踏まえたうえでの、ウィズコロナ・ポストコロナ時代の初年次教育の展望について、以下の3点を挙げたい。

まず1点目は、教育のデジタル・トランスフォーメーション（Digital Transformation、以下DX）化へ向けた取り組みである。「文部科学省におけるデジタル化推進プラン」¹³⁾にみるように、教育方法、教育インフラとしてのデジタル機器の活用は、当初のアナログをデジタルに置き換えるだけの教育ツールから、そこで収集される「教育データの利活用」にシフトしつつある。この教育データの利活用に基づく教育改革が教育のDXである。

「I」「II」では、LMSの早期の導入に始まり、これまで数多くのデジタルデータを積極的に集積してきた。この集まったデータは分析を経て、継続的な授業コンテンツや評価方法などの改善にフィードバック

されている。そして、これらの成果の一部は研究成果としても学外に公表してきた^{14)～20)}。今後もこの流れを継続することで、さらなる改善を志向していきたい。

また、コロナ禍によるこの数年にわたる遠隔授業の知見を活かして、対面と遠隔の教育方法のブレンド化を図りたい。本学でも、学生のデジタル端末（ノートPCなど）のBYOD（Bring Your Own Device）化が実現すれば、この流れの一層の加速が期待できる。本来、もっとも対面的であるTBLというアナログ的教育手法を前提とした本科目に、遠隔授業のエッセンスを取り入れることは、とりわけチャレンジングな試みであろう。

一方で、「I」「II」は初年次開講の全学共通必修科目を全学科の教員と日ごろ学生と関わる機会の多い職員が協働してチームティーチングで実施するという特性により、入学直後からのすべての学生の動向をモニタリングできる「データ収集プラットフォーム」の役割を果たすことができる。アンケートや出席状況などの、入学後間もない段階からの学生の動向の把握が全学科をとおして同時にできるため、早期の問題発見やその後の対応が可能となる。これは本学において、初年次教育科目の重要な役割の1つであると考ええる。

このように、「I」「II」は、すでに教育のDXを実現するための十分なポテンシャルを有しているといえる²¹⁾。実際、AI（機械学習）を用いたレポートの解析による指導が行われており、データ駆動型の教育研究による教育の質向上が期待される¹⁵⁾。さらには、教員が一方向的に教えるのではなく、ファシリテーションが重視されてきた初年次教育²²⁾において、今後のもっとも重要なキーワードの1つになると考えられている「デジタルファシリテーション」²³⁾を実現・推進できる先駆的科目になると考える。

2点目は入学前教育との連携である。本学では従前より全学共通入学前プログラムを実施してきたが、コロナ禍の2020年度を機に装いを新たりモー

トプログラム（「1st ステッププログラム」）に移行した。本プログラムは、リモート上でチームビルディングを行うまったく新しい試みである。入学予定者は、他学科の入学予定者とこの場をとおして初めて出会い、プログラムに沿って関係性を構築する（チームビルディング）。この過程で、入学への不安の解消やモチベーションの向上を図ることが本プログラムの目的である。そして、ここで体験するチームビルディングの手法を、入学後の「I」「II」と共通のフォーマットとすることで、初年次教育への導入という位置づけを明確化させるとともに、それらの相乗効果による教育的効果の向上をねらいとしている。

さらに、本プログラムには「I」「II」を経験した上級生がSA（student assistant）として参加し、入学予定者のサポートにあたっている。上級生のSAにとって本プログラムは、「I」「II」で身につけたチームビルディングの手法を「ファシリテーター」という立場に置き換えて実践できる、リーダーシップを体験的に学ぶ場ともなっている。この「I」「II」から入学前教育への学生の循環性も重要な連携要素である。

本学は、医療と教育という対人援助専門職養成課程のみで構成される学部構成が大きな特徴であ

り、この分野における重要なキーワードが「チーム（チーム医療・チーム学校）」である。入学前から初年次という高校生から大学生のトランジション段階²⁴⁾で、「チームとは」、さらには「チームによる協働とは」という将来にわたるテーマについて導入的に理解する点にも意義を見出したい。上記の1点目と2点目の概要が図4である。

そして3点目は、学内の初年次教育科目群（学びのはじめ科目群）と他の基盤教育科目（従前のいわゆる一般教養科目）との有機的連携である。現在、本学にはこの「I」「II」以外に「大学道場 miniゼミ」という初年次教育科目が設定されている。将来的にはこの科目間連携を深めることによって、本学の初年次教育科目の教育的効果をより高めることができるのではないかと考える。この連携には、チームティーチングなどの授業運営方法の共通化や、ルーブリックなど評価法の共通化などが想定される。本学の初年次教育科目群には、2022年度現在、専任教員103名中63名の教員と職員3名が携わっている。これだけの教育的リソースをチームティーチングで最大限に活かし、一方では科目間連携により科目群としてのねらいを明確化し、その結果として教育的効果を高度化することで、本学の初年次教育は時勢に先んじた展開

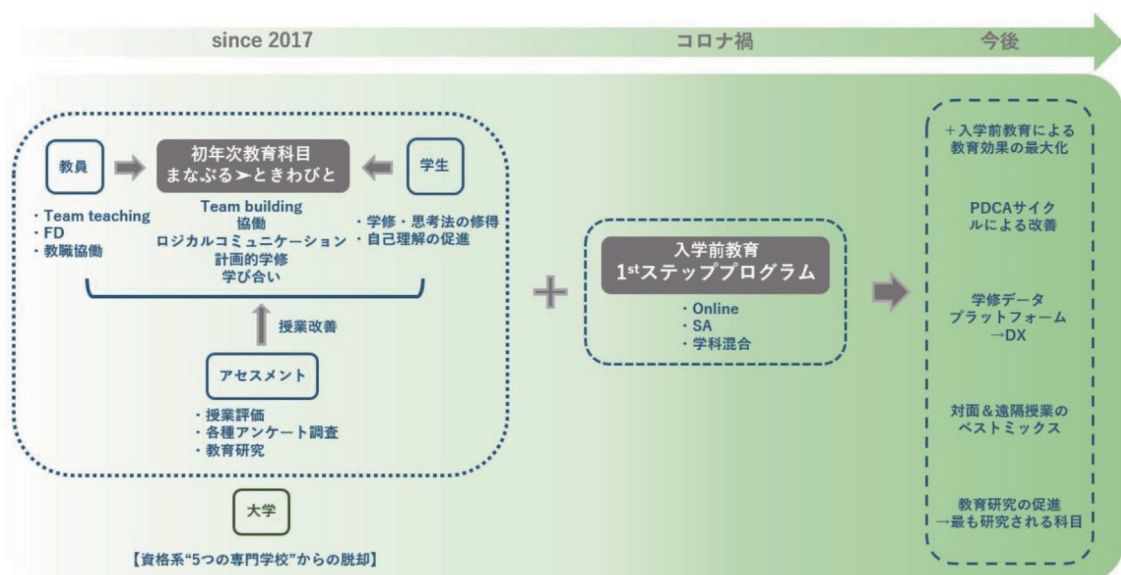


図4 神戸常盤大学における初年次教育の今後の展望

をみることができる²⁵⁾と考える。

また、初年次教育科目以外の基盤教育科目との連携については、すでに今年度より「情報基礎」「情報メディア演習」において運営方法や授業コンテンツについての連携へ向けた改善に着手した。本科目の授業内容は、現在文科省が推し進める「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」²⁶⁾の認定要件の一角をなすものであり、この連携により、互いの授業で学んだ内容を双方の授業にフィードバック（応用・展開）しつつ相乗的に学んでいくという効果を期待したい。

このような科目間連携を皮切りに、さらに基盤教育科目群間の連携を拡充（横展開）していくことで、本学独自の教養教育における新しい光明を見出していけるのではないだろうか。

今後の課題

以上、神戸常盤大学における初年次教育の開発と実践をPDCAにより推進してきた。多様化した入学生の対応を迫られる大学として、初年次教育の役割は非常に大きいといえる。とりわけ対人援助専門職を育成する本学にとって、学生の学修意欲の喚起は最重要課題といえる。それぞれの目指す専門職の魅力ややりがいを初年次から実感・経験させるとともに、学ぶ科目の必要性についても丁寧に伝えていくことが求められる。また、多様な意味での大学への早期適応、居場所感の確立、学びに対する充実感、達成感の涵養も求められる。

われわれはコロナ禍を経て、対面授業・遠隔授業、それぞれの長所・短所について知ることとなった。対人援助専門職を育成する本学の特性上、対面授業が主となるが、ウィズコロナ・ポストコロナ時代にあっては、初年次教育のみならず対面・遠隔のそれぞれの長所を活かしたハイブリッドな授業展開が求められる。遠隔授業の長所としては、学生が自分の理解度（ペース）にあわせて学習できる（何度でも同じ授業を閲覧することができる、

時間や場所を選ばず学習できるなど）、環境設定をうまく行えば、教員が受講者全員あるいは個人に対して、質問への回答や課題のフィードバックを即時・適宜行え、対面授業に比して、学生が質問を行いやすい環境を作ることでもある。また遠隔授業の推進は、授業外学修、事前・事後学修の促進、通常化に繋がった。その一方で、課題が増加し、学生の授業外学修時間が増加し、これまで個々の教員に委ねられていた課題の提示や総量についても、大学が組織として把握しなければならないという状況も生まれた。学生のICTリテラシーの上達が図られる一方で、ICT学修環境の整備やより丁寧な学生サポートもこれまで以上に求められるようになった。

このように個々の教員や学生に委ねられていた授業の運営状況を学科、学部、大学として管理、把握する必要性も生じており、さらに、われわれが提唱してきた重要他集団（Significant Other Groups：SOGs）による大学改革も含め¹⁷⁾¹⁸⁾、ウィズコロナ・ポストコロナ時代における大学の組織としてのガバナンスのさらなる充実が、より一層求められる状況となっている。

本科目の授業運営は、浅枝麻夢可、市川尚、伊藤彰、今西麻樹子、氏橋貴子、内橋一恵、江口実希、大川直美、大城亜水、尾崎優子、桂千広、川井綾、北川薫、木村英里、紀ノ岡浩美、京極重智、桐村豪文、國崎大恩、小崎遼介、牛頭哲宏、坂井利衣、笹尾裕美、佐野太亮、澤村暢、白石奈央、島袋梢、高久圭二、高藤真理、高松邦彦、立垣祐子、田中達也、田村周二、戸谷富江、永島悟、中田康夫、中村美紀、中村由果理、西川潤、西保亜希、長谷川大輔、畑山千賀子、原希代、伴仲謙欣、藤原桜、松岡真奈、三浦真希子、光成研一郎、光安早織、南利明、室崎友輔、柳田学、山崎麻由美（50音順）とともに実施した。

謝辞

第1次教学マネジメント改革を主導してくださいました、前学長の故上田國寛先生のご功績を偲び、衷心より哀悼の意を表します。

付記

本稿は、初年次教育学会「2021 年度教育実践賞」優秀賞を受賞²⁷⁾した申請書の内容をもとに大幅に加筆修正したものである。

本稿の一部は、初年次教育学会第15回大会において発表した²⁸⁾。

本研究は JSPS 科研費 20K02983 の助成を受けたものです。

文献

- 1) 初年次教育学会編. 進化する初年次教育. 世界思想社, 2018. ISBN978-4790717225.
- 2) 桐村豪文, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 野田育宏, 光成研一郎, 中田康夫. 基盤教育の設計 ～教職協働による教学マネジメント改革の成果～. 神戸常盤大学紀要. 2018, vol. 11, p. 181-192.
- 3) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会. “卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）, 「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン”. 2016, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/___icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf, (参照 2022-08-15).
- 4) 土持ゲーリー法一. 「教育」から「学習」へのパラダイム転換. 教育学術新聞. 2013, 11月13日号.
- 5) 中央教育審議会. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～”. 文部科学省. 2012, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf, (参照 2022-08-15).
- 6) 中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて（答申）”. 2008, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm, (参照 2021-09-15).
- 7) 光成研一郎, 桐村豪文, 國崎大恩, 牛頭哲宏, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 中田康夫. 教育から学習へ：教育のパラダイム転換 ～「まなぶる」ときわびとI」の実践から～. 神戸常盤大学紀要. 2018, vol. 11, p. 7-16.
- 8) 教育新聞. “(新しい潮流にチャレンジ)「主体的・対話的で深い学び」は授業改善”. 2018, https://www.kyobun.co.jp/commentary/c20180924_01/, (参照 2022-09-15).
- 9) 中田康夫, 伴仲謙欣, 高松邦彦, 光成研一郎. “全学合同初年次教育科目における質保証の取り組みー アナログ的・デジタル的手法を織り交ぜてー”. 第25回大学教育研究フォーラム発表論文集. 2019, p. 133.
- 10) 三浦真希子, 佐野太亮, 溝越祐志, 澤村暢, 大城亜水, 京極重智, 伴仲謙欣, 高松邦彦, 中田康夫, 光成研一郎. 臨床検査技師養成課程の初年次教育科目に「チーム医療」の実践を見越して“チームビルディング”の手法を導入することの意義. 第15回日本臨床検査学教育学会学術大会、臨床教育学. 2021, vol. 12, p. (supp.) p58.
- 11) 京極重智, 高松邦彦, 大城亜水, 伴仲謙欣, 川崎弘也, 中田康夫, 光成研一郎. “コロナ禍における初年次教育と入学前教育の現状について”. 初年次教育学会第14回大会、発表要旨集. 2021, p. 44-45.
- 12) 河合塾編著. 初年次教育でなぜ学生が成長するのかー全国大学調査からみえてきたこと. 東信

- 堂, 2010. ISBN978-4798900032.
- 13) 文部科学省 デジタル化推進本部. “文部科学省におけるデジタル化推進プラン”. 2020, <https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000089227.pdf>, (参照 2022-08-15).
- 14) Takamatsu, Kunihiko; Noda, Ikuhiro; Bannaka, Kenya; Murakami, Katsuhiko; Kozaki, Yasuhiro; Mitsunari, Kenichiro; Omori, Masato; Nakata, Yasuo. “A new Concept of Digital transformation, Institutional Research, and Information and Communication Technology in Higher Education based on Eduinformatics”. *Proceedings of Seventh International Congress on Information and Communication Technology*. Springer Nature, 2023, p. 233-24.
- 15) Takamatsu, Kunihiko; Ito, Akira; Kirimura, Takafumi; Murakami, Katsuhiko; Kozaki, Yasuhiro; Kishida, Aoi; Noda, Ikuhiro; Ichikawa, Nao; Bannaka, Kenya; Kozaki, Ryosuke; Omori, Masato; Nakata, Yasuo. “Introducing new mass screening in institutional research based on Eduinformatics”. *IIAI Letters on Institutional Research*. 2022, p. 1-6.
- 16) Takamatsu, Kunihiko; Murakami, Katsuhiko; Kozaki, Yasuhiro; Bannaka, Kenya; Noda, Ikuhiro; Mitsunari, Kenichiro; Omori, Masato; Nakata, Yasuo. “Eduinformatics: A New Academic Field Needed in the Age of Information and Communication Technology”. *Intelligent Sustainable Systems: Selected Papers of WorldS4 2021, Volume 1 (Lecture Notes in Networks and Systems Book 333)*. Springer Nature, 2022, p. 139-147.
- 17) Takamatsu, Kunihiko; Murakami, Katsuhiko; Noda, Ikuhiro; Bannaka, Kenya; Nakata, Yasuo; Kozaki, Yasuhiro; Kishida, Aoi; Kabutoya, Hiroki; Mitsunari, Kenichiro; Omori, Masato. *New Proposal of University Reform by Significant Other Groups in Eduinformatics*. *International Journal of Institutional Research and Management (IJIRM)*. 2021, vol. 5, no. 1, p. 96-105. <https://www.iaiai.org/journals/index.php/IJIRM/article/view/681>,
- 18) Ichikawa, Nao; Takamatsu, Kunihiko; Murakami, Katsuhiko; Kozaki, Yasuhiro; Noda, Ikuhiro; Bannaka, Kenya; Kishida, Aoi; Kabutoya, Hiroki; Mitsunari, Kenichiro; Omori, Masato; Nakata, Yasuo. “University Reform for Competency-Based Education using Eduinformatics by Significant Other Groups”. *Advanced Applied Informatics (IIAI-AAI), 2021 10th International Institute of Applied Informatics (IIAI) International Congress on*. Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE). 2021, p. 225-230.
- 19) Nakata, Yasuo; Bannaka, Kenya; Murakami, Katsuhiko; Kozaki, Yasuhiro; Mitsunari, Kenichiro; Takamatsu, Kunihiko. “Evaluation of a First-Year Course Using Factor Analysis”. *Advanced Applied Informatics (IIAI-AAI), 2020 9th International Institute of Applied Informatics (IIAI) International Congress on*. Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE). 2020, p. 385-390.
- 20) Nakata, Yasuo; Kozaki, Yasuhiro; Bannaka, Kenya; Kondo, Mizuki; Mizokoshi, Yuji; Mitsunari, Kenichiro; Takamatsu, Kunihiko. *Sustainability of Equal Evaluations Among Teachers of First-Year Students in Higher Education*. *IEEE/IIAI International Congress on Applied Information Technology 2019*. 2019, p. 21-26.
- 21) 高松邦彦, 伴仲謙欣, 光成研一郎, 中田康夫. “初年次教育をデジタルトランスフォーメーション (DX) の視点で捉え直す —教育の質保

- 証のためのリフレクシオン”。初年次教育学会
第15回大会発表要旨集. 2022, p. 71-72.
- 22) 菊地滋夫. コロナ禍における初年次教育の組織
的展開―「自立と体験1」の経験から―. 初年
次教育学会誌. 2022, vol. 14, no. 1, p. 56-61.
- 23) デジタルファシリテーション研究所. “デジ
タルファシリテーションとは?”. [https://
digitalfacilitation.org/about-dfl/](https://digitalfacilitation.org/about-dfl/), (参照 2022-09-
15).
- 24) 溝上慎一. “トランジションを見据えた高校・
大学教育改革”. 2014, [http://www.highedu.
kyoto-u.ac.jp/trans/img/7_0926-2014.pdf](http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/img/7_0926-2014.pdf), (参照
2022-08-15).
- 25) 高松邦彦, 光成研一郎, 川崎弘也. “初年次教育
科目が大学内の人的ネットワークに与える影
響”. 初年次教育学会第15回大会発表要旨集.
2021, p. 36-37.
- 26) 数理・データサイエンス教育強化拠点コンソー
シアム. “数理・データサイエンス・AI (リテ
ラシーレベル) モデルカリキュラム ～ データ
思考の涵養 ～”. 2020, [http://www.mi.u-tokyo.
ac.jp/consortium/pdf/model_curriculum.pdf](http://www.mi.u-tokyo.ac.jp/consortium/pdf/model_curriculum.pdf),
(参照 2021-09-15).
- 27) 初年次教育学会. 「2021 年度教育実践賞」審査
結果報告. 2022, 5p. [http://www.jafye.org/wp-
content/uploads/nl14.pdf](http://www.jafye.org/wp-content/uploads/nl14.pdf), (参照 2022-08-15).
- 28) 光成研一郎, 伴仲謙欣, 高松邦彦, 中田康夫.
“ウィズコロナ・ポストコロナにおける全学共
通初年次教育科目「まなぶる ➤ ときわびと」
について”. 初年次教育学会第15回大会発表要
旨集. 2022, p. 20.